

土木技術者への エール

建設論評

『土木の未来・土木技術者の役割』『プロフェッションとしてのシビルエンジニア(案)』。前者は2006年度の土木学会会長特別委員会報告書。後者は土木学会コンサルタント委員会のプロフェッション研究小委員会の提言書。どちらも、土木技術者のあるべき姿と進むべき方向の指針と提言である。特に後者は、「25年を見据えたシビルエンジニアの挑戦」の副題がついており、真摯(しんし)な現状反省に立って、プロフェッション(知的専門職業)としての土木技術者像とその社会的使命を、ひたすら希求した内容で読

み応えがある。

一部を引用してみる。〈学生は学校が自己能力開発の場であるという認識が薄く、大学の教官は、学生を自立したプロフェッショナルに育てる意識に乏しい。エンジニアは、国際競争力

に欠け、プロフェッション意識が低い。役人は、管理的な業務の忙殺され、真に国民のために考えている人が少ない〉。〈工学を超えた自然科学や、人文・社会科学と連携し、持続型社会の構築を目標とするシビル・エンジニアリングの原型を構築する必要がある〉。〈シビルエンジニアは、国民との信頼意識に立脚した賢い関係を築くことで国家や社会基盤の「サステナ」へと変身していく〉。(◇内は筆者要約引用)

土木学会のこうしたメッセージの発信に拍手したい。そして、日本の土木技術者にささやかな5つのエールを贈ります。

①欧米からシビル・エンジニアリングの言葉と概念が入ってくるはるか昔から、日本には自

然と人間の共生を基本にした技術と技術者によって、持続型社会を形成する「土木」が存在していた。自信を持ってください。

②日本の土木は当初から、自然と人間の折り合いを創る市民のための総合技術であった。ミリタリー・エンジニアリングの対比としてシビル・エンジニアリングを意識した欧米の発想より、純粹かつ先駆的なのです。

③日本の土木技術者のプロフェッション意識が低いのは、プロとしての技量と責任を極限まで要求されずに、市場が拡大してきたからである。責任の所在と範囲が明確であることが職能の条件であり、土木技術者をプロフェッションと捉える市民の意識や視点が希薄なものそのためです。

④戦後の日本の行政や政治の仕組みは、モノを大量につくることを前提に構築されてきた。そのことに市民が気付き反発し、より価値あるモノをより効率的につくる仕組みを要求している。その仕組みを構築するために、あらゆる分野のプロフェッショナルの能力結集が要求されています。

⑤そのことによって、全ての職能(弁護士、会計士、医師など)のプロフェッショナルティを、厳しく問う機運が高まっている。この新プロフェッショナルリズムは、土木技術者のプロフェッショナルティを、社会と市民が認知する絶好の機会となる。この機を逃さない戦略的な挑戦と健闘を期待します。

(連)